

「亀井戸まで」の記憶

佐藤 邦夫

「寺田寅彦」をはっきり知ったのは二十二歳を過ぎてからのことだが、寅彦の書いた随筆はよい文章のお手本として教科書によく採用されたそうだから、中学・高校の授業で教わった可能性がある。そう考えて思い出してみた。

高3の国語の授業でのこと、その国語の教師は三十代の「あんちゃん」ぼい人だった。教科書に確か「亀井戸まで」という文章が載っていて、それを読んだ時に「この吉村冬彦というのは筆名で、寺田寅彦と言う人が書いているのだ。理学博士で東大教授だったから、すげえ人なのだ」と言っていて妙に力説してくれたような、不確かな記憶がある。当時の教室の光景が目には浮かび、教師の口吻が聞こえて来るようだ。

一九六六年のことだ。しかし、それきり筆者は何も感じることとはなく忘れていた。(四年後、その「すげえ人」を知ったが、あの教師が言われた人とは気付かなかった。)

それで数年前、『寺田寅彦全集』で随筆「亀井戸まで」を探してみたのだが、全集の函の裏に記されている作品名の中には無いことが分かった！ 記憶違いだったのだろうか？ と悩んでしまった。

先日、再度「亀井戸まで」探しを思い立った。新版全集の第十七巻の索引で調べてみたら、「亀井戸まで(蒸発皿の中) …③24」と載っていた。単独の随筆ではなかったのだ。

随筆「蒸発皿」は一九三三年六月『中央公論』に載った。

四編の文章(一亀井戸まで、二エレベーター、三げじげじとしらみ、四宇宙線)を集めたものだ。「亀井戸まで」は四ページしかない小文である。要約して示すと、

丸の内仲通りを歩いていると、三十格好の男に亀井戸への寅彦が東京会館で友人と晚餐をとった帰途、ひとり道を尋ねられた。五、六歳の男の子をおぶっていた。

父子の身なりが貧相で哀れに思った。それで、その身上をいろいろ(幾通りも)推測してみたが、最後は「電車賃をあげればよかったです」と反省した。

という文章である。およそ教科書に相応しくない文章にも思えるのだ。このやや悲しいような話が、何故、教科書に採用されたのだろうか？ という疑問が湧いて来た。

そこで、この筆者の記憶について確かめようと、古い教科書を保存している機関に問い合わせしてみた。霞ヶ関にある「教育図書館」には一九六六年に使われた高3の国語の教科書全部(十五冊)を調べていただいたが、「該当する文章は見当たりません」とのことだった。：がっかりした。四十五年前の授業のひとつまなのだから、記憶していること自体が異常かも知れない。筆者がそう思い込んだ可能性がある。何故なのだろうか？ あるいは高2の時だったのか？ 今度「教科書図書館」を訪ねて調べてみようと思っている。